

令和4年度 能美市立和気小学校 学校経営具現化に向けた学校評価表

項目		具体的方策	主担当	【評価指標】 〈成果指標〉 〈努力指標〉 〈満足度指標〉	【評価の根拠】 達成度判断基準	評価	前期評価からの 分析と考察	今後の改善策	学校運営 協議会 による意見	後期 評価	成果と課題	学校運営 協議会 による意見
1	組織的な 学校運営	【ロードマップの活用】 学校力向上ロードマップを 活用し、組織的・計画的に 運用する。	竹田	【努力指標】 自分の担当分掌について、毎月 ロードマップを検証すること で、取組の見直しが行われて いる。	【教師アンケート】 「自分の担当分掌について、毎月 ロードマップを検証し、適切な 取組となるよう見直しを行った」と 肯定的に回答する教師の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 A 100％	・肯定的な回答の割合のうち、A評価は55.6％、B評価は44.4％であった。主任だけでなく、関わる各担当が責任をもってPDCAを意識して取り組むことができています。 ・全学年単級の学担業と並行して取り組んでいることやコロナ対応等もあり、余裕をもって計画を立てることが難しいところがある。	・教務主任を始め、各主任が2ヵ月先を見通して各担当への声かけ、計画や打合せなどの連絡を密にする。 ・三部会で、「C」「A」の具体的方法（いつ、どこで、どのように）を具現化する。	不登校が心配される児童については適切な対応を取ってほしい。			
		【校内支援体制の充実】 不登校等の未然防止のための 校内支援体制や教育相談、 児童理解の会を充実させ、 専門組織との連携に努める。	藤田・室山	【努力指標】 情報交換を密にし、担任や各 主任が連携・協働し、諸課題 の早期解決・未然防止に努める。	【教師アンケート】 「情報交換を密にするため、校内 支援会議を学期に2回設ける」 A：2回できた　B：1回できた C：1回もできなかった	【教師】 A 2回	・校内支援会議を1学期に1回行い、夏季休業中に1回行った。また、職員会議の後に児童理解の会を行い、共通理解をはかった。	・校内支援会議によって、該当児童の困り感をさぐり、今後の学校生活の送り方や学習支援の在り方を検討した。今後、支援員も含め、学校全体で共通理解と実践を行っていく。	業務改善を進め、児童のための時間確保に努めてほしい。			
		【業務改善】 多忙化改善に向けた取組や 意識改革を推進すると共に 協力・協働による有効な （効率的な）業務遂行を図る。	教頭	【努力指標】 業務の平準化やワークライフ バランス意識の向上に努めると 共に協力・協働による効率的な 業務遂行を図る。	【教師アンケート】 「学校運営において、業務の平 準化やワークライフバランスを 意識し、業務改善に努めた」と 回答する教師の割合が A：90％以上　B：80％以上 C：70％以上　D：70％未満	【教師】 B 89％	・昨年度と比べると、多忙化改善に向け、校務分掌の平準化が進んできた。アンケート結果もよくなっているが、一方まだまだ先生方の意識向上に頼っている面大きいと思われる。	・各種行事・取組について提案時に「なくす」「減らす」「変える」を意識する。 ・反省を元に来年度の予定を立てておく。 ・行事や取組の反省は、変更点・申し送り等がよくわかるよう赤字にしておく。				
2	確かな 学力の 育成	【授業力の向上】 児童が自分の考えをもち、 表現できる授業をつくる。	永吉	【成果指標】 児童が自分の考えをもち、表現 できる授業をつくることができ ている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師】「児童が自分の考えを 持ち、それを表現できるように 指導している。」と肯定的に 回答する教師の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【児童】「授業の中で自分の 考えを書いたり話したりして、 自分の考えを表現している。」 と肯定的に回答する児童の割合 が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 87.7％	「考えを表現する」という視点は学校研究の重点としても取り組んでいることなので、教師の意識はとて高い。 児童については、考えを持つことが難しいことやそれを表現することに抵抗がある児童がいる。	児童が考えを表現できるようにするために、まずは考えを持たせる時間を確保する。さらに、現在取り組んでいるペアやグループの場を利用して、表現に抵抗感のある児童への配慮をしたい。				
		【GIGAスクールの推進】 ICTを効果的に活用した授業 構想を立て、実践を進める。	永吉・稲井	【努力指標】 ICTを効果的に活用した授業 構想を立て、実践を進めるよう に努めている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師】「1日に2回以上、ICT を使った授業を行っている」と 肯定的に回答する教師の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【児童】「1日に2回はクローム ブックを使って学習している」と 肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 B 75％ 【児童】 A 86.7％	「とにかく使ってみる」という昨年度の段階から、今年度の「効果的に使う」という段階に移ったことで、教師は端末の使いどころをよく考えるようになった。アナログの方が効果的なこともあり、端末活用にやや消極的になった教師もいる。 児童はAIドリルなども含めて、端末を使った学習に慣れてきている。	・教師自身も端末を用いた意見交流の利便性に気づいていけるよう、職員間の意見交流の際にジャムボードを活用するなどして教師自身も端末活用に慣れていけるようにする。 ・研究授業ではクロームブックの効果的な使いどころがないかを検討する。	児童の学力向上に繋がるよう授業の内容を工夫し基礎基本の定着を図ってほしい。			
		【学力の向上①】 AIドリルや帯タイムを活用 して基礎学力の定着、習熟 を図る。	竹田	【成果指標】 単元末テストの平均（知識及び 技能）で （低）90点以上　（高）85点 以上 達成した児童の割合が8割以上 を目指す。	【各種教育データ】 単元末テスト（知識及び技能） で低学年90点、高学年85点以上 達成した児童の割合が、 A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【国語】 D 57.4％ 【算数】 C 63.6％	・低学年で達成した児童の割合は国語43.5％、算数54.5％、高学年は国語66.7％、算数70％であった。学校全体として国語の基礎学力に課題がある。 ・到達率が60％以上80％以下の児童の割合は、国語37人／137人で27％、算数27人／137人で20％で、これらの児童を全体指導で引き上げるとともに、到達率60％以下の児童への個別支援が必要である。	・漢字・計算を粘り強く指導していくとともに、1学期で定着できていないところを各学年が把握し、AIドリルや帯タイムを活用して定着・習熟を図る。 ・授業の中で、身に付けるべき知識及び技能を意図的に活用する場面（特に国語における言語活動）を設定し、達成感を味わわせるようにする。	読書に親しむ環境と働きかけを工夫して取り組みを進め、読書好きの子どもを増やしてほしい。			
		【学力の向上②】 家庭学習の指導と評価を行い、 家庭学習の習慣化に努める。	竹田	【成果指標】 家庭学習の指導と評価を行い、 学習時間「学年×10分」として 習慣化を目指す。	【各種教育データ・教師アンケート】 【教師】「家庭学習の指導や評価 の工夫をしている」と肯定的に 回答する教師の割合が、 A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【児童】家庭学習強化週間で、「 学年×10分」学習できた日が 5日以上と回答する児童の割合 が、 A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 80％	・教師の肯定的な回答のうち、Aは62.5％、Bは37.5％であった。漢字練習・算数ドリル、音読を中心に指導している。その中で、漢字練習方法ややる気につながる評価方法を工夫しているが、なかなか習慣化できない児童への指導の徹底を担任だけでなく、学校全体で支援していく必要があると考えられる。	・習慣化できていない児童の把握・共有し、学校全体で指導方法を共通実践する。 ①保護者と連絡を取り合う。 ②提出できなかった場合にどうするかを明確にしてやり切るよう指導する。 ・個に応じた指導が必要な場合は、担任や学力向上担当、特別支援コーディネーター等と連携し、個に応じた目標を持って取組、達成感につながるようにする。				
		【学力の向上③】 読書活動を充実させ、読書の 質の向上を図る。	稲井	【成果指標】 各学年のおすすめ10冊を1年間 で読むことができる。	【各種教育データ】 「おすすめ10冊」のチェック カードを前期、後期に集め、 検証する。（達成率） 前期…50％以上 後期…100％以上達成した 児童の割合が、それぞれ A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【児童の割合】 D 32％	・おすすめの本5冊達成者 1年 12人　2年2人　3年2人 4年19人　5年17人　6年3人 合計32名 ・5冊達成できた割合は32％だったが、休み時間に利用できる枠が増えたことと、教師の声掛けもあり、昨年同時期より5冊達成者の割合が増えた。（昨年度7％）	・教職員への取組の周知を図り、「おすすめの本」の利用を促す。 ・おすすめの本達成者を表彰したり、季節のイベントにおすすめの本を絡めたりするなどする。				

3	豊かな心の育成	【児童会活動の充実】 児童主体の児童会活動を通して、主体的実践的な態度を育成する。	藤田・野上	【成果指標】 児童が児童会活動に積極的に参加し、児童会目標を達成しようとしている。（児童会活動とは、各行事、委員会の取組、たてわり活動など）	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】 「児童が主体的に取り組めるように働きかけた。」と肯定的に回答する教師の割合が、 A：85％以上　B：75％以上 C：65％以上　D：65％未満 【児童アンケート】1～4年「児童会活動の取組に積極的にさんかできた。」56年「学校をよりよくするために進んで児童会活動に取り組むことができた。」との肯定的な回答する児童の割合が、 A：85％以上　B：75％以上 C：65％以上　D：65％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 B 83.9％	・教師アンケートと児童アンケート（56年）の結果95.1％、また、各委員会の取組内容や児童の姿からも、主体的に委員会活動に取り組んでいたと言える。一方、1～4年生の積極的に参加できた児童の割合が、少なかったことから改善の余地がある。	・前期委員会の任期は、10月初旬までなので、運動会を通して、自分たちの委員会で「みんなのために働く」意欲や行動につなげたい。また、運営委員会が中心となり児童会の組織と高学年の役割などの説明動画や各委員会の取組のPR動画を作成し、1～4年生への理解と周知を強める。さらに、各委員会の取組で、よかったクラスや児童を紹介し、価値づけていくようにする。				
		【ライフスキル教育の推進】 ライフスキル教育の共通実践を通して、児童一人ひとりの自己有用感を向上し、認め合い支え合う学習集団をつくる。	藤田	【成果指標】 ライフスキル教育研修で学んだことやセカンドステップ実践を学級経営や特別活動に取り入れることで、児童がお互いの考えや意見を認め合うことができている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「ライフスキル教育研修で学んだことやセカンドステップ実践を学級経営や特別活動に取り入れている。」と肯定的に回答する教師の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【児童アンケート】低「自分の考えや意見をみんなに聞いてもらっている。」高「自分の考えや意見をみんなに認めてもらっている。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 A 87.5％ 【児童】 A 91.3％	・教師アンケートのA評価37.5％、B評価50.5％だったことから、5月開催のライフスキル研修の内容を教師が十分に活用できずにいたにも関わらず、児童がみんなに認められているという意識が高くなってきたといえる。一方、低学年に自分の意見を聞いてもらっていないと答える児童が10.3％いることから、聴くことは相手を認めるということにつながることを理解させた。 ・だれかの役に立っているという児童アンケートのAB評価が80.7％であることも踏まえ、みんなのために働く機会やふりかえりを大切にしたい。	・学習集団づくりの振り返りを交流しながら、「自主自律」「みんなのために働く」児童の姿につながる研修を計画し、2学期の共通実践につなげる。ライフスキルが学級経営の一助であることを踏まえ、ルールづくりとリレイションづくりのバランスを大切にしたい内容を取り入れる。 ・コロナ状況を注視しながら、対面型の講師研修を計画する。 ・総合の学習の時間でお世話になった、ゲストティーチャーや地域にお礼をしたり自分たちでできることを主体的に考え実践したりする機会をつくる。				
		【道徳授業の工夫】 道徳の指導法を工夫し、考えを聴き合い伝え合う授業づくりを行い、道徳的実践につなげる。	室山	【満足度指標】 児童が道徳の授業で学んだことを生活に結び付けたり生かしたりしようとしている。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「授業の終末に自分事としてとらえさせる時間をとることができた」とする教師の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【児童アンケート】「おうちの人と道徳的価値について話合うことができた」と肯定的な回答する児童の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 83.3％	・教師が授業の中で、終末を大切に自分事にとらえさせ考えさせる時間をつくっていることがわかった。一方で、児童が学習したことと生活を結び付けて生活できるような手立てが求められる。	・4月当初に提案した、今年度の道徳の取組を再確認し、別業の活用、教室掲示による見える化、家庭との連携を強化していく。 ・夏休み中に研修会を開き、2学期の道徳につなげたい。また、ゲストティーチャーを積極的に招待し、生きた教材から学ぶことや感じることを大切にし、生活や態度につながるようにしたい。				
4	健やかな身体の育成	【体力向上の工夫】 体力アップ1校1プランの取組等を推進し、体力の向上を図る。	清川	【成果指標】 50m走の記録を6月に計測し、それよりも10月には平均で1秒縮める。	【各種教育データ】 【体力テスト①②の結果】 該当学年の50m走の記録が6月の計測時よりも10月の記録が平均で1秒縮めることができたのは3学年中、 A：3学年が達成　B：2学年が達成 C：1学年が達成　D：どの学年も未達成	取組中	・R3年度の体力テストの体力合計点がどの学年も上回っていた。50m走の結果についても5年生以外は県平均を上回っていたので良い結果といえる。50m走の計測も10月に行うため、具体的な分析は計測後、記載する。	・昨年度の結果と比べると、どの分野も飛躍的に向上したため、体育委員会の取組や体育の授業を行うときの継続的な体力向上の取組が実を結んだといえるので、今後も継続的に行う必要がある。	全国学力学習状況調査の質問紙調査からも本校児童のメディア利用時間が長いことがわかる。保護者への啓発に努めてほしい。			
		【生活習慣の確立】 「早寝早起き」の習慣化やメディア利用の約束を行い、基本的な生活習慣を確立することで、心身の健康の保持増進を図る。	清川・木戸口	【成果指標】 メディア利用の約束を守り、早寝早起きを定着させることにより、心身の健康が保たれていることを実感している。	【生活アンケート・保護者アンケート】 【生活アンケート】メディア利用の約束を守り、早寝早起きができていると回答している児童の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【保護者アンケート】8時間以上の睡眠時間（低：9時間、高：8時間）を週に4日以上とることができたと肯定的に回答する保護者の割合が A：90％以上　B：80％以上 C：70％以上　D：70％未満	【児童】 B 70％ 【保護者】 B 89.3％	・早起き（6時半まで）ができている児童は76％、早寝（1、2年9時、3、4年9時半、5、6年10時までに寝る）ができている児童は64％であった。メディア利用の約束は、決まっている家庭が64％、そのうち守れている児童は76％であった。どちらも学年によって差があったが、メディア利用時間が長い児童は就寝時刻も遅い傾向にある。89.3％の保護者が「十分な睡眠時間の確保を心がけている」と答えており、保護者も睡眠の重要性については理解していると考えられる。	・夏休み中は生活習慣が乱れていることが考えられるため、登校日から生活リズム改善シートを取組を行い、2学期をスムーズにスタートさせられるようにする。また、2学期中にも生活アンケートを行い、メディア利用時間と就寝時刻の相関関係等、生活習慣改善の手立てが児童にもわかりやすいように、おたより等で発信していく。生活習慣はすぐに変えられるものではないため、児童の実態に合わせ、今後も粘り強く、保護者の協力も得ながら継続的に指導していく。				
5	家庭・地域との連携	【ふるさと教育の推進】 ふるさとを知り、ふるさと愛を育む、ふるさと教育を推進する。	教頭	【努力指標】 地域教材等地域の特色を生かしたふるさと教育の推進に努める。	【教師アンケート・児童アンケート】 【教師アンケート】「地域教材等地域の特色を生かした教育活動の推進に努めた」と回答する教師の割合が A：90％以上　B：80％以上 C：70％以上　D：70％未満 【児童アンケート】「生活科・総合や地域の方との学習は好きですか」と回答する児童の割合が A：90％以上　B：80％以上 C：70％以上　D：70％未満	【教師】 A 100％ 【児童】 A 92％	・特色ある地域の学校としてふるさと教育を推進している。総合・生活科の中にカリキュラムとして位置づけられていることが大きい。	・「各学年間の交流をもつ」など実践を発信する。 ・学校だよりやHPを活用し、保護者や地域への発信をする。 ・取組が継続するよう、学年毎の申し送りファイルを作る。				
		【学校運営協議会との連携】 学校支援ボランティアの組織化を進め、教育活動の充実を図る。	教頭	【満足度指標】 学校支援ボランティアにより教育活動の充実が図られている。	【教師アンケート】 「学校支援ボランティアにより教育活動の充実が図られている」と回答する教師の割合が A：90％以上　B：80％以上 C：70％以上　D：70％未満	【教師】 A 100％	・学校支援ボランティアがきちんと組織されているわけではないが、計画的に実施されている。ただ、急な支援連絡、連絡先、支援内容、人材活用など未整備されていることもある。	・ボランティア組織化に向け「登録票作成」し、「コーディネートの仕組み化」を進める。 ・計画的に実施できるよう「年間計画の活用、職員会議等での確認」をしていく。	ふれあい活動や授業の支援などお手伝いできることがあれば、遠慮なく伝えてほしい。			
		【あいさつができる子の育成】 気持ちよい挨拶ができる子を育てる。	藤田	【努力指標】 児童が相手意識を持って挨拶をしようとしている。	【児童アンケート・保護者アンケート】 【児童アンケート】「学校で「おはようございます、こんにちは、さようならなど」のあいさつを自分からすることができる。」と肯定的に回答する児童の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満 【保護者アンケート】「子どもは地域や家庭であいさつをしている。」と肯定的に回答する保護者の割合が A：80％以上　B：70％以上 C：60％以上　D：60％未満	【児童】 A 91.5％ 【保護者】 A 94.7％	・児童アンケートから、気持ちのよい挨拶をしたり自分から挨拶をしたりする意識が安定してきている。保護者アンケートから地域や家庭の挨拶の意識も高まってきている。	・児童会の運営委員会を中心にしたいあいさつの取組を継続して行っていく。よい児童やクラスを放送やグラフで見える化し価値づけていく。 ・学校だよりやホームページなどを通じて、地域や家庭へのあいさつの啓発を行っていく。				